実践に役立つ研究とは：研究者と実践者の協働関係

渋谷崇行¹⁾

What is an Ideal Way that Research Can Serve the Practical Field?: Cooperative Relationships between Researchers and Practitioners

Takayuki Shibukura¹

Abstract

The main goal of sport psychology as a branch of applied psychology is to convey scientific knowledge to the practical or coaching fields related to exercise and sports. The present paper considers the most ideal ways that research can serve the practical field and how it can foster the leadership abilities of the coaches of the extracurricular sports activities in schools. We identify the ways coaches obtain practical knowledge and the problems existing there in. In addition, we discuss the necessity of a cooperative relationship between researchers and practitioners. Finally, a conceptual model that shows the ideal way that research can serve the practical field and the cooperative relationships between researchers and practitioners is presented.

In this model, it is shown that the following two aspects are possible positive outcomes of cooperative relationships between researchers and practitioners; 1) the generation of theoretical knowledge that matches the actual situation of the practical field, and 2) the obtainment of practical knowledge through evidence-based practices. The model further demonstrates that cooperation between researchers and practitioners leads to higher awareness in two areas. These two areas are as follows; 1) methodology derived from theoretical knowledge applied in the practical field, and 2) research subject derived from practical knowledge adopted into research. Therefore, building cooperative relationships between researchers and practitioners for generation of these two areas should be considered when searching for ideal ways that theoretical research can serve the practical field.

Key words: practical knowledge, theoretical knowledge,
cooperative relationships between researchers and practitioners,
extracurricular sports activities in school, fostering the leadership ability of coaches

1) 新潟県立大学人間生活学部
〒950-8680 新潟県新潟市東区海老ヶ瀬471
連絡先：渋谷崇行
E-mail: sibukura@unii.ac.jp

1 Faculty of Human Life Studies, University of Niigata
Prefecture
471 Ebigase, Higashi-ku, Niigata-shi, Niigata 950-8680
Corresponding author: Takayuki Shibukura

実践に役立つ研究の必要性

運動やスポーツに関わる実践や指導に科学的な知識をもたらし、それらを充実・発展させていくことは、応用心理学の一分野であるスポーツ心理学の重要な課題である。実際に、多くのスポーツ心理学者は、研究の成果を現場の実践に役立てたいと考えている。しかしながら、自分の研究が現場の実践に役立っていると感じている研究者はどれだけいるであろうか。筆者自身もこれまでに運動部活動に関するいくつかの研究を行ってきたが、それが現場の指導や実践に役立てられているという実感は正直なところ薄いといわざるを得ない。2012年12月に開催された第10回スポーツ動機づけ研究会では、「スポーツ動機づけ研究の将来を語る」というテーマのもと、我が国のスポーツ動機づけ研究を牽引してきた研究者を囲んで活発な議論が繰り広げられた。そこでの大きな論点の1つは、現場を反映した研究をいかにして行い、その成果をいかにして現場に還元できるのかということであった。また、伊藤（2004）は、スポーツ動機づけ研究のあり方を論じる中で、理論的な研究を行う場合にあっては、常に実践との関連を意識した研究を行うことの重要性を指摘している。つまり、研究を行うことで実践のどこを変えたいと考えているのかということを確認することによって、多くの人にスポーツ実践の改善に役立つ視点を与えられるようになることが述べられた。このように、スポーツ心理学の研究成果が実践の現場で活用されることは大いに期待されている。しかし、そうした意識を持ちつつも、実際に行われる研究はそれに応じられていないのが現状であろう。それでは、どのようにすれば現場の実践に役立つ研究を行うことができるのか。この問いに対する筆者なりの考えを、理論と実践、あるいは研究者と実践者との関係性を論じる中から導きたい。

実践現場としての運動部活動が抱える問題

運動部活動は、「スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒が、より高い水準の技能や記録に

挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動であるとともに、体力の向上や健康の増進にも極めて効果的な活動」である（文部科学省，2008）。運動部活動の意義については様々な意見があるが（園山，1998；内海，1998；清水，2006），およそ「健康・体力」，「生涯スポーツ」，「楽しさ体験」，「人間形成」，「学校生活への貢献」として、教育的，社会的な側面からまとめることができる。そうした運動部活動の指導は学校で計画される教育活動として、主に当該学校の顧問教諭の指導の下で有意義な活動になるよう取り組みがなされている。

このような中、2013年1月に、運動部指導者から受けた体罰を原因として高校生が自殺するという事件が報道された。このことを受け、関係省庁や自治体では今まさに運動部活動指導の在り方が議論されている。体罰の抑止に向けた対策については様々な意見があるものの（たとえば、神谷，2013；間野，2013；山浦，2013），運動部活動における指導が指導者と部員との間にある教育的な営みであることを考えれば、高い指導力を備えた運動部指導者の育成こそ急務の課題といえるであろう。このような問題意識から、本稿では「運動部指導者の指導力の育成」という課題を取りあげ、そこにおける現場の実践に役立つ研究のあり方を考究する。

運動部指導者の指導力：実践知とは

運動部指導者を含めたスポーツ指導者の指導力に関わる研究は、これまでも多く行われてきた。たとえば、石井ほか（1996）は、一流ジュニア指導者の指導理念を調査し、「人間的成長」を中心とした「努力」，「自主性」，「感謝」の3つからなる指導理念の構造を導いた。また、北村ほか（2005）は、高校サッカー指導者のメンタル・モデルを検討する中で、指導者は自身の役割が「選手の人間的成長」と「サッカーのパフォーマンス向上」にあると捉えており、そのために、「選手の自立」と「スキル獲得」に向けた指導を行っていることを示した。これらの指摘から、運動部指導者には部員の競

技力の向上とともに、人間的成長に関わる指導力を備えることの重要性が示唆される。そのような多様な側面を備えた運動部指導者の指導力は、彼らの専門性を支える実践知であるという見方ができる。

楠見（2011b）によれば、実践知とは「日常生活の文脈において問題を解決するために、経験を通して学んだ知識を適用・活用し、実行・達成を支える知能」のことである。また、西（2008）は、学校教育における実践知を「教師の日々の具体的場面での効果的な実践を支え導く知識」というように捉えている。さらに、実践知の特徴としては、①個人の実践経験によって獲得されること、②仕事において目標指向的であること、③仕事の手順や手続きに関わること、④実践場面に役に立つことがあげられる（楠見，2011b）。このようにみえてくると、運動部指導者の指導力は実践知の概念とよく適合することがわかる。したがって、我々が関心を持つ「運動部指導者の指導力の育成」とは、彼らの実践知の獲得をいかに促進するかということになるといえる。

実践知の獲得に向けて研究が取り組む課題

1. 実践知の獲得方法

つづいて、運動部指導者が実践知を獲得する方法について理解を進めたい。このことに関連する研究としては、これまでに運動部指導者の養成に関わる研究（たとえば、新保・高根，2010）などが散見されるものの、運動部指導者の指導力の育成に焦点をあてた研究はほとんど行われていない。そこで、ここでは様々な領域に共通する実践知獲得の学習のタイプを参照することにする。楠見（2011a）によれば、実践知を獲得する学習のタイプには、「観察学習」、「他者との相互作用」、「経験の反復」、「経験からの帰納と類推」、そして「メディアによる学習」がある。

「観察学習」とは、初心者が意図的にモデルとなる先輩や熟達者を選択し、そこに注意を向けてその行動を記憶内に保持し、適切なときに自らを動機づけることによって実行することで

ある（楠見，2011a）。ここで、運動部指導者が観察学習を行う際にモデルとなる主な対象者は、多くの場合、同じ運動部を指導する他の熟練指導者となるであろう。適切なモデルが周辺にいる場合には、彼らの指導する姿を観察することによって多くの学習が可能になるといえる。しかし、現状では全ての運動部指導者が観察学習の機会に必ずしも恵まれるわけではない。特に小規模校などでは単独で運動部活動の指導を任されることもあり、そうした場合には、観察学習の対象となるモデルを見つけるのは困難ということになる。

つづいて、「他者との相互作用」とは、周囲の他者との対話や教え合い、情報のやりとりによって学習することである。このプロセスでは、①熟達者がモデルとなって実践活動を示す、②初心者がそれを模倣する、③熟達者がフィードバックを与える、④初心者が修正するという、一連の観察学習とコーチングが含まれる（楠見，2011a）。指導力を高めるうえで、特に初心者の段階では、他者との相互作用は非常に有効である。実際に学校の教師は初任者研修というかたちで、熟練教師をモデルとして観察学習とコーチングのプロセスを経験している。ただし、運動部活動の指導については校内研修として熟練指導者の指導実践を観察したり、自らの指導実践について指導を受けたりする機会はほとんどない。また、近年では大学の教職課程で学校教員の指導力の育成に向けた科目の改善が試みられているにも関わらず（小松崎，2008）、運動部活動における指導力の育成を目的とした科目が設定されるという動きは今のところみられない。このような現状を鑑みると、熟達者から指導を受けて指導力を高めるということは、運動部活動指導においては一般的ではないといえそうである。

「経験の反復による学習」とは、スキルや知識を蓄積することである。一方、「経験からの帰納と類推」とは、蓄積されたスキルや知識などをその類似性に基づいて共通性を見出したリ、類似の状況に転移させたりすることである（楠見，2011a）。運動部指導者が毎日の運動部

活動で指導を行う機会は豊富にあるといえ、そうした日々の経験から実践知を獲得していくことは大切なことである。そこでは、単に指導行動を繰り返すだけではなく、指導力の向上に向けた明確な目標を持ち、自らの指導行動に深い省察を加えることが重要である。そのことは、運動部活動における指導が、自分自身の思い込みや科学的根拠に反する独善的な指導に陥らないためにも強調されることである。ところで、実践知と対照をなす概念に理論知があるが、理論知は実践知を分析する枠組み・視点・方法を提供することができる。このことから、省察においては理論知の参照が不可欠であるといわれている（柴田ほか、2010）。

最後の「メディアによる学習」とは、書物、テレビ、インターネット、それに研修の機会などを含む各種のメディアを通して新しい知識を入手することである。運動部指導者は、専門家が著す指導理論や研究者が行う研究の成果にメディアを介して触れることができる。そこで運動部指導者は必要な知識を入手し、それらを自らの指導実践に活かして新たな実践知の獲得に結びつけることが可能である。ここでは、運動部指導者がいかにして有意義な情報にアクセスできるかということが重要となる。

2. 研究が取り組む課題

以上、楠見（2011a）に基づいて実践知の獲得方法を概覧してきた。そして、ここでは運動部指導者が実践知を獲得する際のいくつかの課題が指摘された。たとえば、運動部指導者は観察学習の機会に必ずしも恵まれるわけではないということ、そして、運動部指導者が熟達者から指導を受ける機会は、実際にはほとんどないということが指摘された。これらの課題については、運動部指導者が観察や指導を受けられる機会を持てるよう、制度上の整備を行うなどの対策が求められるといえる。また、運動部指導者が日々の指導行動に省察を加える際には理論知の参照が不可欠であること、そして、運動部指導者は新たな実践知の獲得が可能となるよう、それに必要な知識を入手することの重要性

が指摘された。これらの課題については、研究によって生み出される理論知が大きな役割を果たすといえる。ここで、実践知と対照をなす概念に理論知があることはすでに指摘したが、西（2008）は理論知を「科学研究に基礎をおく知識」としたうえで、学校教育における実践知と理論知との関係について次のように述べている。すなわち、学校教育における理論知と実践知は、一方のみでは現実の教師の具体的行為や判断の基準となる十分な知識とはいえず、両者が相互補完的にあることが重要であるということである。また、楠見（2011b）は実践知が暗黙知、そして理論知を包含する形式知、これら両者の円環から成り立っていることを述べている。これらの指摘からも、現場の実践や実践知の獲得において理論知が重要な役割を果たしていることがわかる。したがって、研究の立場からは、実践現場にとって有意義な理論知を導き、それを実践者である運動部指導者に伝えることにより、彼らの実践知の獲得を促進していくということが大きな課題ということになる。

ところが、指導現場からは、研究が実践に役立っていないとの声が聞かれることもある。たとえば、岡澤（2012）は自らのフィールド調査の経験を振り返り、研究を開始した当初は「選手や指導者が何に困っているのかということよりも、研究者自身の興味や関心に従って研究を行ってきた」ことを紹介している。このようなことは筆者自身にも心当たりがある。我々研究者は、はたして現場で必要とされる研究を行っているのであろうか。このことに関して自問する必要があるだろう。また、岡澤（2012）は、「スポーツ心理学は問題やなぜそうなるのかを解説してくれるが、解決策を提示できない」との指摘を、現場から受けたことも紹介している。実践現場の指導者にとって、研究の成果として生み出される理論知が難解であったり、指導に応用できなかったりということでは意味がない。はたして、それらが現場の実践に活かせるようになっているのであろうか。我々研究者は、こうした点についても自らに問うてみる必

要がある。

以上を整理すると、「実践現場で必要とされる研究を行う」こと、そして「研究成果を実践で活かせるようにする」ことという2つの内容は、これまで研究の実践に対する貢献が不十分であった点といえるかもしれない。別の言い方をすれば、「実践に役立つ研究」ではこの部分に焦点を当てることが求められており、これらの内容が運動部指導者の実践知の獲得に向けて、研究が取り組むべき課題になると考えられる。

実践に役立つ研究とは： 研究者と実践者の協働関係

1. 研究者と実践者の相互交流の必要性

応用科学としての側面を持つスポーツ心理学が生み出す理論は、実践で活用されることによってその意義を見出すことができる。そのような点からは、実践に役立つ理論知をいかに生み出すかということが研究者に課せられた使命といえる。ところで、学校教育分野では、研究者が生み出す理論知と実践者が有する実践知を段階的に捉える見方がある。McIntyre (2005) が提唱する学校知識連続体論^{註)}では、8種類の知識を連続体で構成している。西 (2008) は、それらの知識を「実践知」領域、「理論知」領域、理論知と実践知との「相互交流」領域に区分した。そして、理論知と実践知との乖離が生じているという現状に対して、今後の学校教育発展の可能性は「相互交流」領域にあることを指摘している。このような指摘は「実践に役立つ研究」を追究するうえでも当てはまる。とりわけ、本稿で議論している「運動部指導者の指導力の育成」については、運動部指導者の実践知の獲得に向けて「実践現場で必要とされる研究を行う」ことと「研究成果を実践で活かせるようにする」ことが課題としてあげられている。このような課題が導かれる背景には、理論知を有する研究者と実践知を有する実践者の相互交流が図られてこなかったことが関係していると思われる。以降では、運動部指導者の実践知の獲得に向けた研究者と実践者の相互交流が

どのように図られるべきなのか考えてみたい。

1) 「実践現場で必要とされる研究を行う」ことについて

「理論は研究の世界で通ずるものであって現場の指導には役に立たないものである」。実践の現場にいる指導者がこのように考えていたとすれば、その指導者は理論から学ぶことをせず、研究からも距離をおくことであろう。黒羽 (2008) は、学校現場では、そこで共有される実践知と研究者が生み出す理論知との間で、緊密な信頼関係を基盤とした双方向的な交流がなされ難いことを指摘している。このことに対し、黒羽 (2008) は研究者と実践者である教師との関係のあり方として、研究者が単なる第三者として学校を観察・記述・説明するのではなく、研究者と実践者が共通に問題意識を持ち、お互いの専門性を活かした協働関係を構築することが重要であると述べている。

このような研究者と実践者との関係性は、運動部活動に関わる研究を行う際にも重要であると思われる。すなわち、これまで研究者は、自身の関心や問題意識から研究テーマを設定して研究を行うことが多かったといえるが、「実践に役立つ研究」を行うためには、研究者と実践者が現場の問題を共有することが不可欠である。そして、双方の合意のもとで、実践現場の実態を反映した研究課題を扱うことが大切である。いうまでもなく、現場で指導を行う実践者は研究の成果としての理論知が運動部活動の指導に役立つことを期待している。したがって、研究者もそのことを強く意識し、研究成果の指導現場への還元をねらいとして研究課題に取り組む強い姿勢を持つことが望まれる。当然、実践者としても現場の実践に役立つ研究の価値が認められるのであれば、その研究過程に献身的な姿勢をみせることが期待される。その結果として、現場の実態を反映したデータ収集もやりやすくなると思われる。このような関係性において、研究者の側は「研究による実践への貢献」が、実践者の側は「実践に役立つ研究への貢献」が可能になると考えられる。

2) 「研究成果を実践で活かせるようにすることについて

大脇 (2007) は、理論と実践の融合ということに関して、実践から理論への方向性と理論から実践への2つの方向性が考えられるとしている。また、柴田ほか (2008, 2009, 2010) は理論知と実践知の全体構造を図式化 (図1) し、理論知と実践知が統合される方向性として理論から実践へという方向性と実践から理論へという方向性の2通りがあることを説明している。彼らは、理論知と実践知の中間体としての知を融合知と呼び、とりわけ、理論から実践への方向性にある融合知を「実践に適用された理論知」、あるいは「理論から導かれた実践知」と表現した。この融合知は理論と実践を結ぶ橋渡しの役割を担っており、それを媒介することによって理論が実践に繋がることが想定されている。

ところで、「実践に役立つ研究」を行ううえで研究が取り組むべき課題の1つに、「研究成果を実践で活かせるようにする」ことがあった。ここでは、研究の成果として生み出される理論知が実践者にとって難解であったり、そのままでは指導に応用できなかったりすることが問題となっていた。そのような理論知を実践で活かせるようにするためには、理論知と実践知の中間に融合知を想定することが効果的である

と思われる。そして、その融合知を生み出す過程では、理論知を有する研究者と実践知を有する実践者の両者の持ち味を相互に発揮し合うことにより、研究成果の実践での活用方法を編み出す作業が求められるといえる。

2. 実践知の獲得に向けた研究者と実践者の協働関係

これまでの議論をもとにして、「実践に役立つ研究」の過程と研究者－実践者間の協働関係をモデル化したのが図2である。このモデルでは、科学的研究に基礎をおく理論知と、実践者の経験から導かれる実践知が2つの中間体によって結ばれている。

最初に、図の下半分は「実践現場で必要とされる研究を行う」ことに向けた研究者と実践者の協働関係を表したものである。実践知から理論知への方向の中間に「研究課題」が位置している。ここにおける「研究課題」とは、研究者と実践者の協働的活動によって導かれた、実践現場の実態を反映した課題のことである。ここでは、運動部指導者が日々の指導実践を通して有する問題意識とともに、スポーツ心理学の専門家としての研究者が有する研究的関心が導引される。この作業を通じて、実践現場が解明することを望み、研究としても意義がある研究課題が提示される。そして、そのような研究課題

図1 理論知と実践知の全体構造 (柴田ほか (2009) を簡略化して作図)

のもと、研究者は実践者の協力を得ながら研究活動を行い、実践に役立つ理論知を生成していく。つづいて、図の上半分は「研究成果を実践で活かせるようにする」ことに向けた研究者と実践者の協働関係を表したものである。理論知から実践知への方向の中間に「方法論」が位置している。ここでの「方法論」とは、研究者と実践者の協働的活動によって、科学的研究に基礎をおく理論知を指導実践に応用できるように改変されたもののことである。ここでは、研究者の論理的思考とともに実践者の現場的思考が導引される。この作業を通じて、たとえば、現場の実態に即した指導プログラムなどが立案される。そして、実践者は研究者の科学的サポート等を受けながら理論的根拠に基づいた指導プログラムを現場で実践し、運動部指導者としての実践知の獲得を推進していく。

このモデルによれば、研究者と実践者の協働関係に基づく循環的な取り組みによって、実践現場の実態を反映した研究活動による理論知の生成と、理論的根拠に基づいた指導実践による実践知の獲得が可能になる。そして、この循環過程で重要な働きをしているのが2つの中間体である。したがって、「実践に役立つ研究」の

観点からは、「方法論」と「研究課題」をいかにして生み出すかということが大きな課題になるといえる。とりわけ、本稿で注目した「運動部指導者の指導力の育成」に関していえば、重要なことは、望ましい運動部活動を作り上げたいという意志を持った研究者と実践者が、この過程に身をおいて相互交流を図ることである。今後、このような協働関係に基づく研究活動が活発に行われることが期待される。

最後に、今後の課題をいくつか指摘する。1つ目は、研究者と実践者の協働関係をどのようにして構築するかということである。このことは、研究体制やシステム作りに関係することである。2つ目は、研究者と実践者の協働関係による研究過程そのものの効果を、研究によって検証することである。これには実際にこの研究過程を辿ることによる実践的研究を行うことが適当であろう。また、この研究過程をめぐる基礎的研究として、実践者はどのようにして理論知を入手しているのか、あるいは、その理論知をどのようにして実践に活かしているのか、さらには、研究者はどのようにして研究テーマを定めるのか、このような問いを立てて実態把握の研究を試みるのも興味深い。3つ目は、研究

理論知：科学的研究に基礎をおく知識。

実践知：指導実践を通して獲得された知識。

方法論：研究成果を指導実践に応用できるように改変されたもの。

研究課題：実践現場の実態を反映して導かれた課題。

図2 「実践に役立つ研究」の過程と研究者－実践者間の協働関係

者と実践者の協働的活動によって生み出された「方法論」を、いかにして伝達・普及させるかということである。現場の要求に応じた「実践に役立つ研究」が行われたのであれば、その成果を一部の実践者に還元するだけでは研究の役目を十分に果たしたとはいえない。「新しい時代にふさわしいスポーツ指導」の在り方が問われている今、関係団体は運動部指導者やスポーツコーチが研究成果を指導現場に活用することにより、指導力の向上に繋げていくことを推奨している^{注2)}。したがって、研究者は「実践に役立つ研究」の成果を効果的な手段を用いて多くの実践者に伝え、それをスポーツ界全体の共有財産にまでしていくことが今後ますます求められるといえる。

注

注1) 学校知識連続体論では、以下に示す8種類の知識の連続体が構成される。それらは、①日々の教育活動についての技芸的知識、②技術的知識の表出形態、③日々の教育活動についての熟考的・反省的思考、④教育場面におけるアクション・リサーチ、⑤研究開発学校や連続機構により創出する知識、⑥科学的研究に基づく教育活動への実践的示唆、⑦特定主題に関する科学的研究成果の解説、そして、⑧科学的研究に基づく知見と結論である。これらのうち、西(2008)は、①と②が「実践知」領域、⑦と⑧が「理論知」領域、③から⑥までを理論知と実践知との「相互交流」領域としている。

注2) 運動部活動のあり方に関する調査研究協力者会議(2013)はその報告書の中で、指導力の向上に向けて、運動部指導者はスポーツ医科学研究の成果を積極的に習得することの重要性を指摘し、研究成果等の公表の場や研修の機会を積極的に活用することを推奨している。また、スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)(2013)はその報告書の中で、独立行政法人、スポーツ団体、および大学等の役割について、「コーチングに関する最新の研究成果や国際的な動向をコーチの育成制度に迅速に取り入れる」こと、「教員養成課程を含むコーチの育成カリキュラムを充実させる」こと、および「現役のコーチに対しても公開講座や出前講義等によって資質能力向上の機会を提供する」ことなどを推奨している。

文 献

石井源信・石川国広・高見和至・後藤 肇(1996) ジュ

ニア期における優秀指導者の実態に関する調査研究—追跡面接調査の結果をもとにして—。平成7年度日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告No.Ⅲジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究—第3報一、pp.3-24。

伊藤豊彦(2004) 動機づけ研究の課題。スポーツ心理学研究, 27: 73-82。

神谷 拓(2013) 学校部活動の歴史的背景を知り、その役割を考える。コーチング・クリニック, 27(5): 4-7。

北村勝朗・齊藤 茂・永山貴洋(2005) 優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか?—質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築—。スポーツ心理学研究, 32: 17-28。

小松崎敏(2008) 体育教師における教科に関する指導力の育成についての考察—受講生の主観的評価からみた体育模擬授業の成果—。びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 5: 61-68。

黒羽正見(2008) 学校教育研究におけるエスノグラフィーの可能性と課題。日本学校教育学会創立20周年記念論文集学校教育の「理論知」と「実践知」。教育開発研究所: 東京, pp.39-57。

楠見 孝(2011a) 実践知の獲得—熟達化のメカニズム。金井壽宏・楠見 孝編 実践知—エキスパートの知性。有斐閣: 東京, pp.33-57。

楠見 孝(2011b) 実践知と熟達者とは。金井壽宏・楠見 孝編 実践知—エキスパートの知性。有斐閣: 東京, pp.3-31。

間野義之(2013) 制度疲労が生んだ「指導力」の限界…今こそ、スポーツ環境の整備を! コーチング・クリニック, 27(5): 8-12。

McIntyre, D. (2005) Bridging the gap between research and practice. Cambridge Journal of Education, 35: 357-382。

文部科学省(2008) 中学校学習指導要領解説保健体育編。東山書房: 京都。

西 穰司(2008) 教師にとっての「理論知」と「実践知」の現状と課題。日本学校教育学会編 日本学校教育学会創立20周年記念論文集 学校教育の「理論知」と「実践知」。教育開発研究所: 東京, pp.213-229。

岡澤祥訓(2012) 現場の要請に応える体育心理学 理論をフィールドに、フィールドから理論を。体育心理学専門分科会50年記念誌編集委員会編 体育心理学専門分科会50年記念誌 体育心理学専門分科会50年の回顧、そして今後の展望。社団法人日本体育学科 体育心理学専門分科会: 大阪, pp.96-98。

大脇康弘(2007) 「理論知—実践知交流型」カリキュラムの開発。教職研究, 7: 128-131。

柴田好章・水野正朗・清道亜都子(2008) 授業研究における理論知と実践知の統合に関する研究(1)—理論的根拠にもとづく協同学習と作文教育の構想—。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学), 55(1): 175-187。

- 柴田好章・水野正朗・清道亜都子（2009）授業研究における理論知と実践知の統合に関する研究（2）—理論に基づく協同学習と作文教育の授業モデルの提案—, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）, 56(1): 119-134.
- 柴田好章・水野正朗・清道亜都子（2010）授業研究における理論知と実践知の統合に関する研究（3）—協同学習および作文指導における実践分析による理論の再構成の萌芽—, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）, 57(2): 143-160.
- 清水紀宏（2006）学校部活動の意義, 日本体育学会監 最新スポーツ科学事典, 平凡社：東京, pp.135-136.
- 新保 淳・高根信吾（2010）体育教師・スポーツ指導者養成論序説：（Ⅰ）序論—「部活動における保護者からの支援獲得」のための歴史的変遷モデルを事例として—, 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）, 41: 237-250.
- 園山和夫（1998）完全学校集5日制と学校スポーツ, 杉山重利編 どう変わる21世紀の学校体育・健康教育「体育科教育」別冊17第46巻第5号, 大修館書店：東京, pp.61-84.
- スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）（2013）スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）報告書 私たちは未来から「スポーツ」を託されている—新しい時代に相応しいコーチング—, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/017/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/07/02/1337250_1_1.pdf,（参照日2013年7月31日）.
- 運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議（2013）運動部活動の在り方に関する調査研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～, http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/_icsFiles/afieldfile/2013/05/27/1335529_1.pdf#search='%E9%81%8B%E5%8B%95%E9%83%A8%E6%B4%BB%E5%8B%95%E3%81%AE%E5%9C%A8%E3%82%8A%E6%96%B9%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B',（参照日2013年7月31日）.
- 内海和雄（1998）部活動改革—生徒主体への道—, 不味堂出版：東京.
- 山浦一保（2013）真のリーダーシップとは…, コーチング・クリニック, 27(5): 14-17.